

みなさま、この肌寒い中お集りいただきましてありがとうございます。チェルノブイリ子ども基金の顧問、未来の福島こども基金の代表をしております、小児科医の黒部信一です。

チェルノブイリが起きたとき、スリーマイル、チェルノブイリと起きて、次は日本だと思っていたんですけれども、まさかそれが現実になるとは思っておりませんでした。しかしそれが現実になってしまいました。なってしまったところで、どうしたらいいかと思ひまして、それで早速チェルノブイリの子ども基金の有志と広河隆一さんたちと一緒に未来の福島こども基金を立ち上げました。とにかく第一に、本当は福島の高濃度汚染地から逃げてほしい、避難してほしい、避難という言葉は本当は間違いなんで、移住して欲しい、そういうことを考えたんです。つまりもう二度と帰れない。それはチェルノブイリの現実の中で起きていることなんです。ですから二度と帰れない。それをしてもらいたいのだけれども、政府がそういうふうにしてくれませんので、それで次に、ヨーロッパの経験で、放射線被曝をしたというふうに、外部被曝は急性障害を起こします。急性の大量の被曝を起こしたときに起こる急性障害、それは幸いなことに日本ではごく一部の原発関係者だけにしか起きなかったんですけれども、それ以外の人は晩発性障害という時間をたってから出てくるような障害を受けるという低線量被曝の領域にあったわけです。それでも何年もすれば何らかの障害が出てくる確率が高い、高濃度汚染地からは避難じゃなくて移住してもらいたいというふうに思っていたんですけれども、なかなかそれがいろいろな社会的な都合でできなくて。チェルノブイリのときは国家が強権的に一斉に連れ出してしまったのでそういうことはなかったのだけれども、日本では政府がもたもたしてやらなかったのだから、私たちがまず、ヨーロッパでやった、ヨーロッパ諸国もほとんど低濃度汚染されていきましたから、やったことは、食品による内部被曝を避けるということをするために、食品の放射能を測定する器械を現地の人に寄贈して、そして現地の人に運営してもらおうということで、福島といわきを中心に何か所かに測定器を贈りました。そして内部被曝を調べるために福島市といわき市に一台ずつホールボディカウンターという全身の被曝線量を測る器械を贈りました。それによって、低線量被曝の8割は内部被曝ですから、

内部被曝を避けようということを中心にして支援してまいりました。

しかし、それでもなかなか高濃度の、飯館村よりも高いような線量の土地が福島市内にも出ているということが分かりまして、その人たちをやはり除染ではなくて、移住させなければいけないというふうに思いましたが、それもできない。次善の策として先程言った、まず汚染されてない食品を食べ、そして一年間に何回か保養をする。つまり汚染地から出て行って、汚染されていないものを食べる、これもベラルーシの経験から学んだことなんです。ベラルーシでは最初にドイツのNGOやチェルノブイリ子ども基金などが協力して「希望21」という子どもの学校サナトリウムというものを作りまして、そこへ学校単位で保養を行う。ウクライナにも「南」という名前の学校サナトリウムができて協力しました。そちらの方は結局、後継者がいなくて今は活動していませんけれども、ベラルーシの方はいまだに続いております。そしてベラルーシではそれが9か所にまで学校サナトリウムが増えました。日本でもそういうことをやりたいと思って、沖縄の久米島に学校サナトリウムを作ろうということを決めたわけなんです。食品の測定の方は、自治体、生協、いろいろな団体なんかが集まりまして、今全国で80か所以上におよんでいると言われております。

少なくとも私たちがやってきたことは、市民の手で市民のための測定をするということをやってきました。そして数値を教える。しかし行政がやるとこれは安全です、これは安全ではありません、つまり基準値で線引きして、その上か下かでしか教えてくれないというそういうことをやっている。内部被曝の問題もそうです。ごく一部のホールボディカウンターをもっている大学とか研究所なんかでは教えてくれるところもありますが、ほとんど教えてくれません。安全です、安全ではありませんというような仕方ではしか教えてくれません。それで数値をはっきり出すために市民のための測定所を立ち上げるように器械を贈呈していま実際に稼働しております。しかし残念ながら数が少ないので、大勢の人の希望には応えることができないけれども、今後そういう運動が進んでいくことははっきりしていますから、次の保養の方に向けて頑張っていきたいと思っております。どうぞ私たちの活動を見て、そして応援していただきたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。